

岩 溪 と 谷

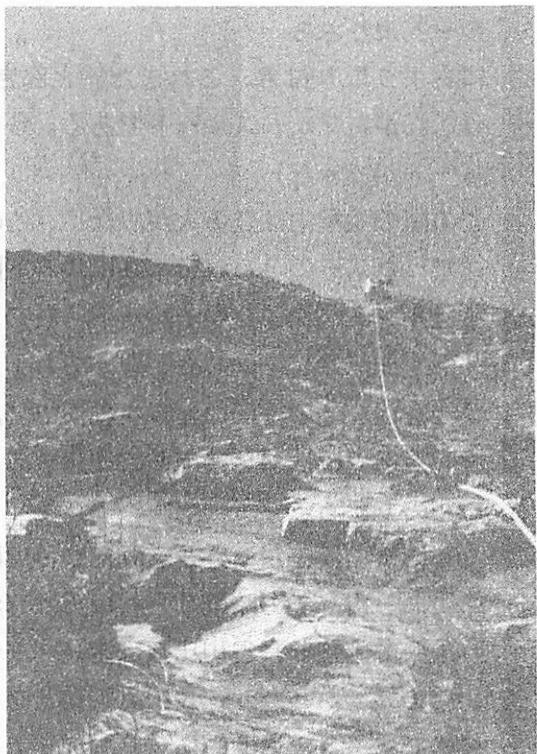
1991年
秋号 10月～12月
第3号

変酋長の”最近感じたこと パートII”

長谷川恒男氏が亡くなられた。氏とは個人的な交際は全くないが、山では何回も会ったことがある。明星山南壁、谷川岳一の倉沢中央稜、八ヶ岳、そして中野融ちゃんの「トレッキング・イン・ネパール」の出版記念パーティーなどなどである。その中で一番想い出深いのが明星山南壁である。

69年9月27日 この日、3パーティが南壁に取り付いていた。私とパートナーTは左岩稜と正面壁を登った後、吉田ルート（当時は下部ダイレクトと言っていた）と正面壁ルートの中間から取り付き、上部岩壁まで一本のラインを作ろうと新ルートを試登していた。（これが後にACCJ直登ルートになる。70年9月22日完登）もう一パーティが八木下氏をリーダーとする登攀同志会のメンバーで、吉田ルートの4ピッチ目から上部岩壁に向かってダイレクトにルート工作をしていた。

（これが後にダイレクトルートになる。69年11月3日完登。八木下 2ピッチ目ルート工作



69年ACCJ直登ルート

氏とは次の年、
70年にフランスのシャモニで
偶然逢い、ザイ
ルを結んでシャ
ペル・ド・ラ・
グリエールを登
攀している。)

残る一パーティ
イが長谷川氏と
K氏のパーティ
であった。長谷
川氏らは、吉田
ルートよりさら

に右より取り付き、これまた、上部岩壁にルートをつなげるつもりであった。
(これが右フェースルートである。69年10月14日完登。初めて上部岩壁に
ルートができた)

この頃の明星山は登る人が少なく、この日取り付いていたのはこの3パーティだけだった。その3パーティ共にルート開拓を目的としていたのである。ACCJ直登ルート、ダイレクトルート、右フェースルートは完登日は違うけれども、ルート工作開始日は同じか、違っても1日違いである。この頃は顔も名前も知らなかつたが、この登攀の記録を山渓で読んで長谷川恒男氏の名前を知った。これ以後、長谷川氏はめきめきその頭角をあらわし、押しも押されぬ名クライマーになつたのである。

その後、何年たつたか忘れたが日付は1月15日、谷川岳一の倉沢中央稜で一緒になった。その時既に長谷川氏は有名人でガイドをやっており、お客様を連れて来ていた。長谷川氏らは後続パーティで、1人のアシスタントと2~3人のお客様の様であったが、登山も職業となると大変だなあと見ていてつくづく思ったものである。でも順調に登り両パーティとも肩の小屋でビバークした。

ヨーロッパ3大北壁を落とした氏は、次にヒマラヤに目を向ける。しかしヒマラヤでは不運な人であった。結局ヒマラヤのピークには一度も立つことができなかつた。長谷川氏はあるこだわりを持っていたような気がする。常にノーマルル



69年ACCJ直登ルート、4ピッチ目ルート工作

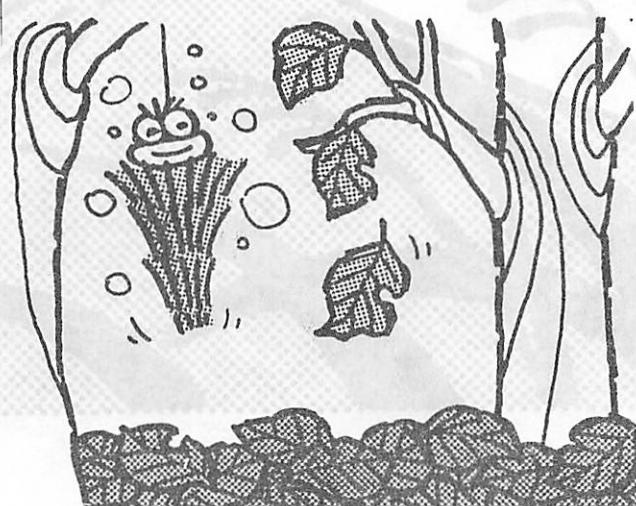
ートではなくバリエーションルートからアタックしている。（未踏の山の場合は適當な表現ではないかも知れない）私は長谷川氏のこのこだわりが好きである。これからもこういうこだわりを追求する様な岳人が多く出てくることを望み、長谷川氏の御冥福を心からお祈り申し上げます。

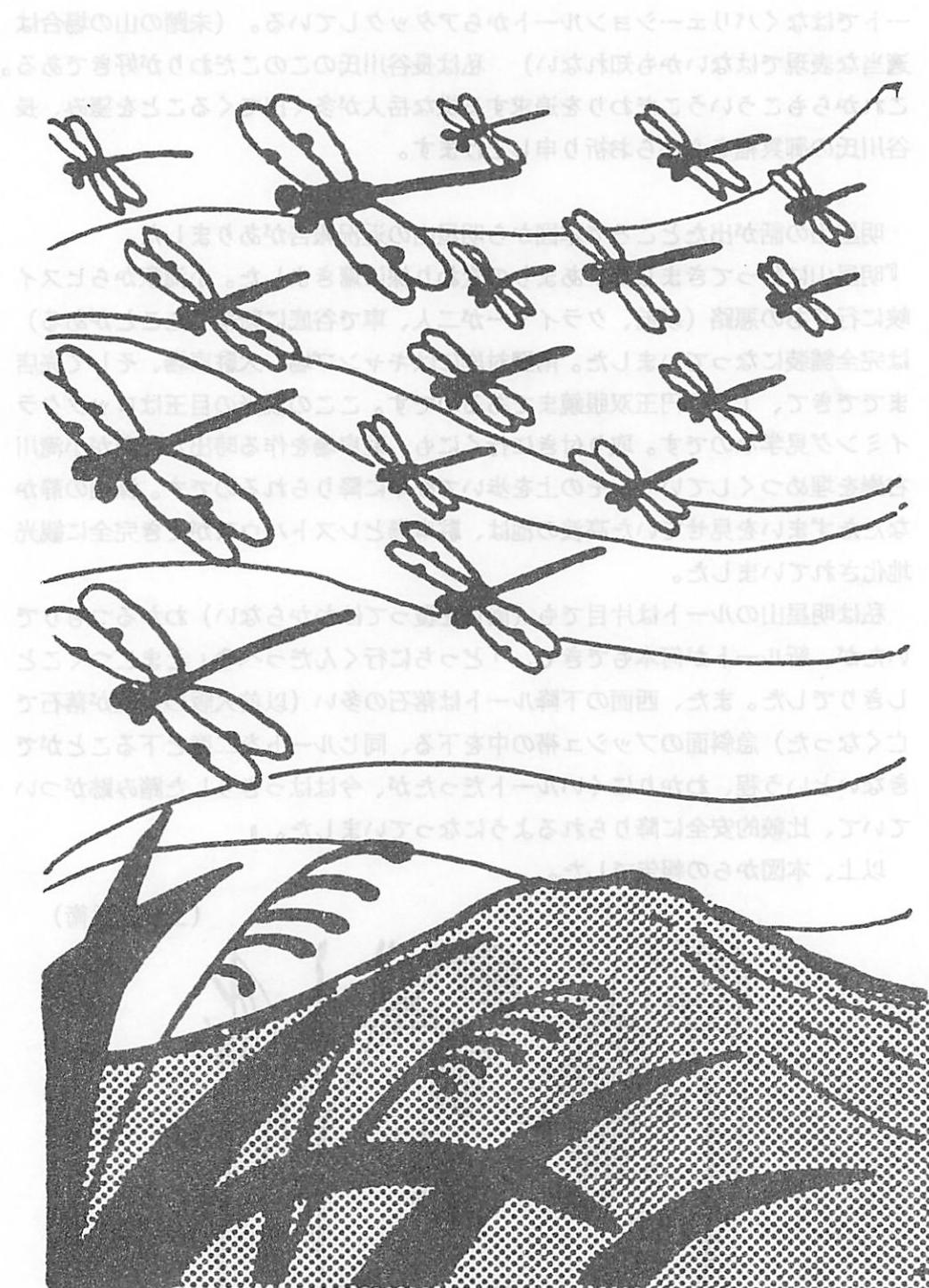
明星山の話が出たところで本図から明星山の近況報告がありました。
『明星山に行ってきました。あまりの変わり様に驚きました。小滝駅からヒスイ峡に行くあの悪路（以前、クライマーが二人、車で谷底に転落したことがある）は完全舗装になっていました。南壁対岸にはキャンプ場、大駐車場、そして売店までできて、100円玉双眼鏡まであるのです。ここの観光の目玉はロッククライミング見学なのです。取り付きに行くにも、駐車場を作る時出た砂利が小滝川右岸を埋めつくしていて、その上を歩いて簡単に降りられるのです。深山の静かなたたずまいを見せていた高浪の池は、駐車場とレストハウスができ完全に観光地化されていました。

私は明星山のルートは片目でも（両目を覆ってはわからない）わかるつもりでいたが、新ルートが何本もできて、「どっちに行くんだっベや」とまごつくことしきりでした。また、西面の下降ルートは落石の多い（以前大阪の女性が落石で亡くなった）急斜面のブッシュ帯の中を下る、同じルートを二度と下ることができないという程、わかりにくいルートだったが、今ははっきりした踏み跡がついていて、比較的安全に降りられるようになっていました。』

以上、本図からの報告でした。

(土度助兵衛)





目 次

日記 良01

石井、舟木、栗原、藤井、土川、田高、岡本 香齋出

1991年 秋号 10月～12月 第3号 ACCJ-茨城01

石井、土川、田高、岡本、香齋、岡本、香齋出

変酋長の”最近感じたこと パートII”	1
集会報告	6
山行報告	7
大峰山塊白川又川岩屋沢	8
明星山P6南壁左岩稜	12
明星山P6南壁右フェースルート	15
松木川ウメコバ沢中央岩峰	18
田高、栗原、井川、藤井、右ルート～R6スペリ台	17
石井裏妙義西大星	20
フリークライミングのメッカ城ヶ崎海岸	
佐藤君の心模様	23
鷹取山（岩トレ）	26
岩手山に遊ぶ	28
編集後記	31

昌中、石井、藤井、土川、田高、田高、岡本 香齋出

日記 良02

土川、木高、田高、田高、沼、昌中、断崖、硝壁、岡本 香齋出

昌中、藤井

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

10月 2日

出席者 本団、高田、川上、佐藤、栗原、長久保、笹沢

10月 16日

出席者 本団、菊池、高田、原田、川上、笹沢

10月 30日

出席者 本団、菊池、鯉河、広瀬、高田、佐藤、笹沢、長久保

11月 13日

出席者 本団、菊池、高田、長久保

11月 26日 91年忘年会(於、みさと)

出席者 本団、木村、鯉河、中島、長浜、広瀬、川北、栗原、高田
原田、高木、鈴木、川上、村上、笹沢

12月 11日

出席者 本団、菊池、栗原、高田、川上、佐藤、長久保

12月 16日

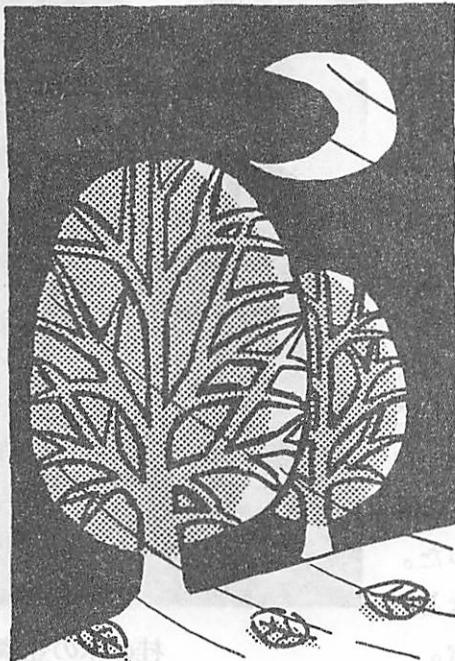
出席者 本団、高田、原田、川上、佐藤、笹沢、中居

12月 25日

出席者 本団、鯉河、菊池、中島、所、高田、原田、高木、川上、
佐藤、中居

山行報告

- 10月23日 大峰山、白川又川岩屋沢 本図、他1名
- 11月3~4日 明星山P6南壁左岩稜ルート L高田、佐藤
- 明星山P6南壁右フェースルート L本図、原田
- 11月10日 足尾、松木沢ウメコバ沢中央岩峰
右ルート～R6スペリ台 L高田、本図
- 11月22日 裏妙義西大星 L本図、佐藤
- 11月25～28日 城ガ崎フリークライミング 佐藤、他8名
- 12月15日 鷹取山（岩トレ） L高田、原田、佐藤
- 12月22～23日 岩手山 L本図、原田
川上、佐藤



大峰山塊白川又川岩屋沢

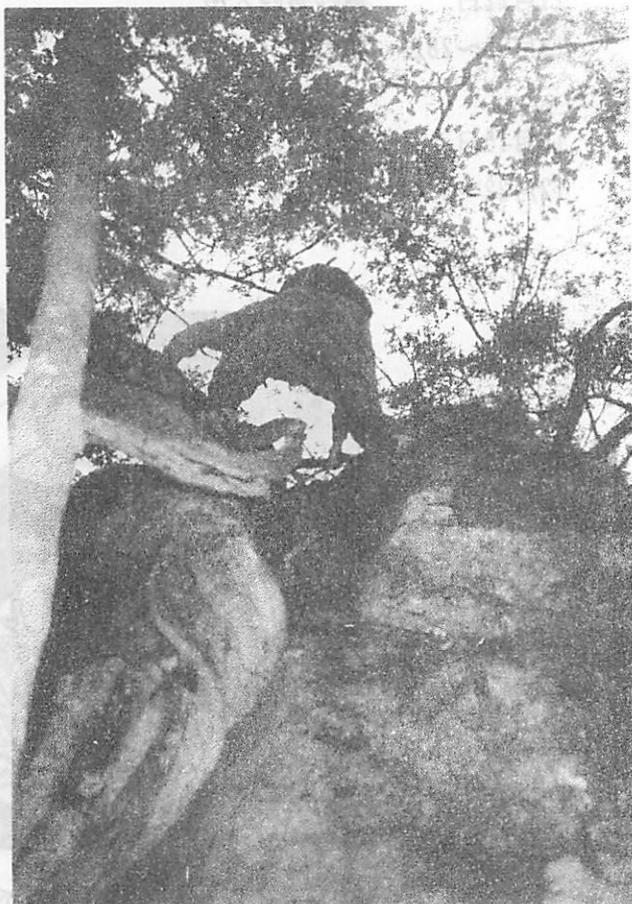
吉澤千山

91.10.23~24

パーティ L 池上昌司（大阪わらじの会）、本図一統

ブルルル・・・・・。『21時発ひかり271号新大阪行き、まもなく発車いたします・・・』。今、私は東海道新幹線の乗客なのだ。私が新幹線に乗るなんて滅多ないことである。何かすごくリッチな気分になるのも田舎者のせいであろうか。まわりはネクタイと背広のゼニトルマンばかりだ。ザックを背負ったダサイな奴は私だけで、少し肩身の狭い思いもするが、考え方を変えると、「あいつらは今仕事中、俺は今平日なのに遊び中、やっぱり俺のほうがリッチなんだ」と、さつき売店で買った缶ビールとおつまみを口に運びながら車窓を眺める私であった。新大阪着23時49分。東京大阪間を2時間50分とは速いものだが、運賃がもっと安ければやなおさらよいのに・・・。

ホームでは今回のパートナーである池上大先生が出迎えてくれた。池上さんは大阪わらじの会の創立会員で、あの剣大滝を単独で登った沢登りの超ベテランである。ここから池上さんの車で大峰山塊の白川又川の支流岩屋沢に行くのである。関西の沢はこれで2度目。何年か前、池郷川に行つたことがある。泳ぎの連続した大変面白い沢だった。さて、今度の沢はどんなところかと期待に胸も膨らむ。



桂の木の登攀

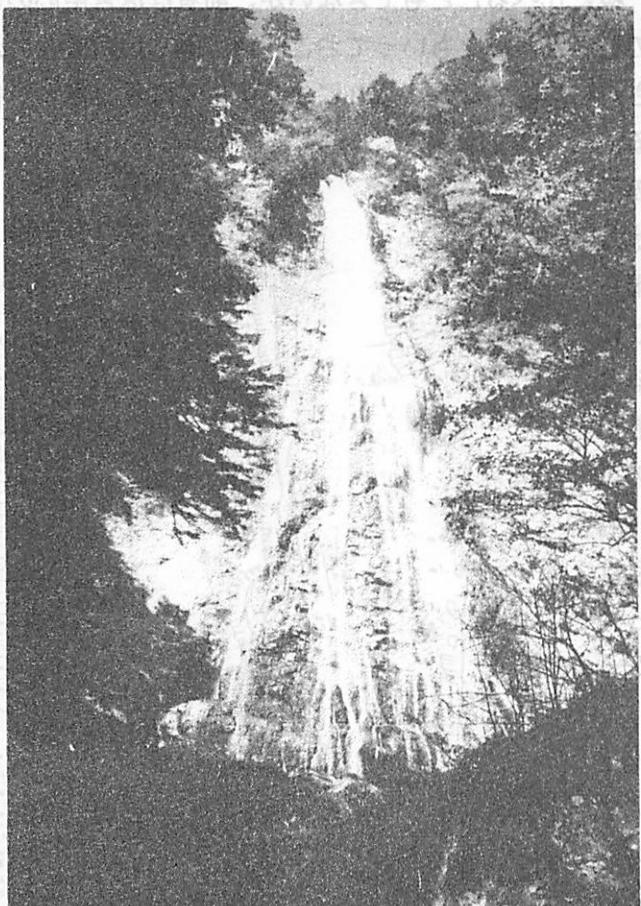
「池上さん、セブンイレブンでちょっと止めて下さい。食糧を買いますから」。
「この辺にはセブンイレブンはないんですよね」。あ、そうか。セブンイ
レブンは全国チェーンではないんだ。ローソンとかファミリーマートは目に入る
が、確かにセブンイレブンはない。初めて知った。何とかというコンビニに寄つ
てから車は吉野川沿いの曲がりくねった道を行く。3時頃だったか、岩屋橋に着
くやいなや図々しい私はすぐ寝てしまった。

10月23日 明るくなると同時に準備をし、すぐ出発する。想像していたよ
り大きな沢である。平凡な流れを行くとゴルジュに出る。水線通しだと泳がねば
ならない。今の時期、早朝から水には入りたくない。左岸を小さく巻く。やがて
大きな岩にぶつかり、水流沿いには行けそうもない。被り気味の岩に桂の木があ
ら下がっている。池上さんは以前にこれを登った記憶があると、この桂の木を登

り始める。私もそれに続いた。今まで桂の木の登攀はしたこ
とがなかった。まるでターザ
ンである。左岸から明るい沢
が流入。ここで小休止。ここ
までの池上さんの身のこなし
は、とても年令には思えない。
岩もガンガン登るし、歩くス
ピードも速い。やはり年季の
入った体力とルートファイン
ディングはさすがだ。

上のゴルジュ入口から約3
0分で岩のトンネルをくぐり、
少しの岩を攀じると80m雌
滝だった。下部がハンギして
いるので落口を見ることはで
きないが、直登するには人工
登攀であろう。右岸のルンゼ
から巻くと、すぐ上は120
m雄滝である。これは大阪わ

らじの会が直登しているが、



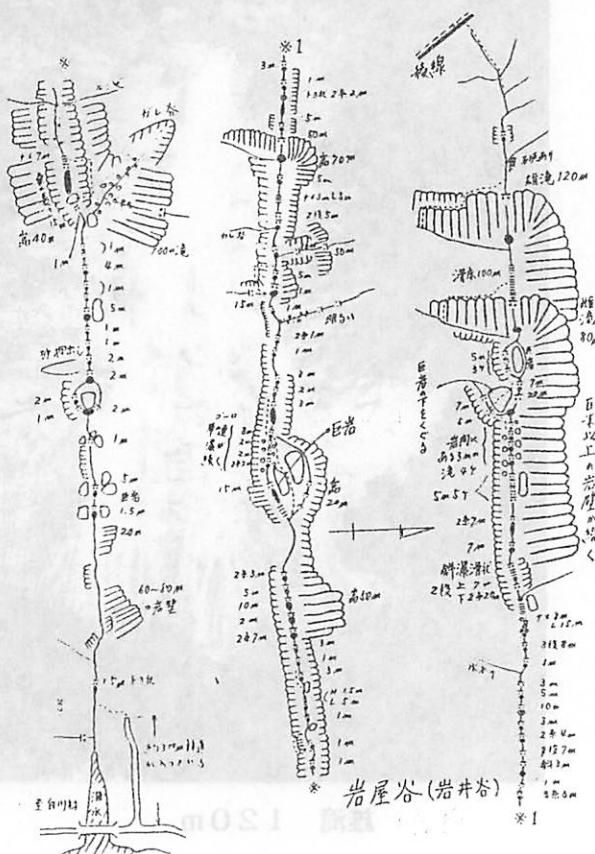
雄滝 120m

けつこうな迫力である。私もどちらかというと、巻き派ではなく直登派なので、滝を眺めながら、あう行って、こう行って、こう登れば落口に出られるな、などと頭の中でルートを作ってしまう。これが又、なんとも楽しいのだ。俺もそういう山キチなんだわな。。。雄滝も右岸から高巻くと、流れは穏やかになり昼食とする。焚火をしながらゆっくり休む。ここから上流は平凡なので遡行はここで打ち切り、左手の稜線に出る。少々のやぶこぎで小峠山を経て下山する。

車で少し移動した所に良いピバークサイトがあった。薪もたくさんあるようだ。焚火を前にビールで乾杯。今日の遡行を振り返ってみる。天気に恵まれて良かった。このところ悪天続きで、日曜日はもう何週連続で雨だろうか。おかげで山行も中止の連続である。はるばる関西までやって来て雨でも降られたら惨めだもんな。池郷川に来たときは雨が降っていたっけ。池郷川は本流を登ったが、今回は白川又川の支流なので、一概に比べることもできないが、前者は泳ぎ中心の遡行に対し、後者は登攀中心の遡行だったともいっておこうか。難しい所はないが、楽しい沢であった。池上さんに感謝しながら眠りにつく。来年は池上さんを谷川岳に案内したいものである。

10月24日 前鬼川の不動七重滝を見学に行く。水量が豊富で7段に落ちる素晴らしい滝である。聞くとここにもすでに直登ルートがあるという。私も登ってみたいものだ。帰りに大迫ダムの奥のほうにある、ひなびた温泉（名前忘れた）で一浴する。私はこの温泉がとても気に入つて思い出深い温泉の一つになつた。

時間もまだ早いので、池上さん宅に寄っていくことにする。池上さん宅は以前花博が行われた神戸のポートアイランドという六甲が正面に見え



る所である。私の頭の中にある団地とは、同じ建物がズラっと建ち並んでいる風景が思い起こされるが、ここはまるで違う。同じ形の建物は二つとなく、すごくカラフルな色彩の建物が並んでいるのだ。さらに私の目を丸くさせたのは新交通システムである。鉄道ではなく、タイヤのついた電車には、運転手も車掌もいなくて、電車がホームに入ってくると勝手に止まり、勝手にドアが開く。乗客の乗り降りが終わると又勝手にドアが閉まり、走り出す。といったあんばいである。田舎者の私はぶつたまげてしまった。

さんざん御馳走になった後、夕方の新幹線で関東は茨城の山の中、八郷町に向かったのである。

岩屋橋発6：25 — ゴルジュ入口7：20 — 巨岩の桂の木8：05
明るい沢出合8：20~30 — 上のゴルジュ入口9：20 —
雌滝9：55 — 雌滝落口10：20 — 雄滝10：25 —
雄滝落口10：55 — 昼食11：05~12：10 — 穂線12：20
— 小峰山(1099m)13：25~35 — 林道14：50 —
岩屋橋 14：55

(本図 記)



小峰山にて（池上さん）

明星山P6南壁左岩稜

91.11.3~4

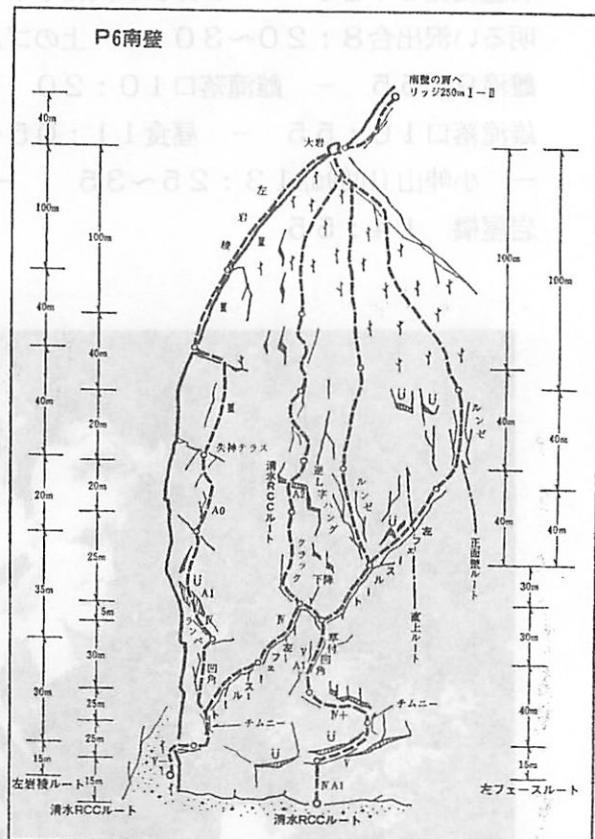
パーティ L 高田暢年、佐藤文則

「明星山南壁」という名前は、私がこの会に入会した時から毎年11月頃、谷川岳にはもう雪が降るし、かといって雪山にはまだ早いしと、シーズンを通して中途半端なこの時期になるといつも出ていたが、いかんせん場所が遠いため、またグレード的にもそう甘くないため、なかなか行けなかつた。それが今年11月3,4の連休で、本団さんの「明星に行くべ」の一言でメンバーも私、原田、佐藤とそろつた。

どこを登ろうか。「日本の岩場」を読み研究する。ここは山というよりスケールでのかいグレンデという感じがある。ルートもフリー化がどんどん進み、多種多様である。その中で私と佐藤パーティは、クラシックルートである『明星山P6南壁左岩稜』をすることにする。

11/2 20:30下館を出発。関越道→北陸自動車道と距離は長いが、殆ど高速道路であり、すいていたため、南壁対岸の駐車場に着いたのは2時頃であった。思ったより近い。

この辺は、以前本団さん達が開拓で通っていた頃は何もなかつたらしいのだが、今は整備された駐車場に水洗トイレ、無料キャンプ場、さらに登攀者見学用?の展望台まであり、あまりの変貌ぶりに本団さんも驚いていた。「日本の岩場」にも、登攀適期は9月中旬~



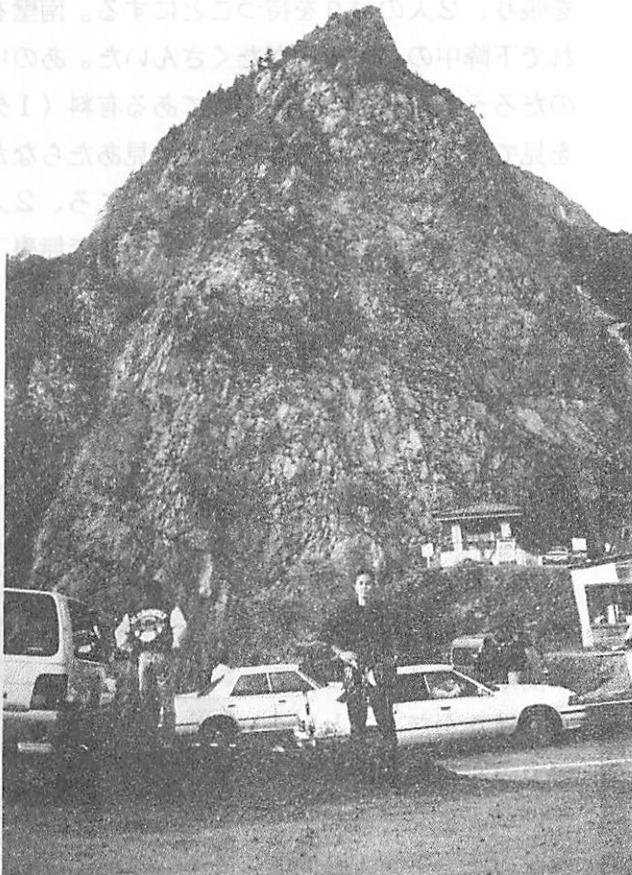
1月月初旬とある通りに他にも登攀者がたくさん来ていた。

本岡さんと原田さんはP6南壁右フェースルートを登る。こちらはグレードも高いしピッチ数も多いため、時間がかかるのを見込んで6時すぎに早々に出発していった。『何がなんでも今日中に戻ってきて、今日の夕食のメニューであるチーズフォンデュを食べるからな!』と檄を入れているのが印象的であった。

さて我々も車の所で登攀具をつけて、出発の準備をする。なにせ秋の日没は早い。我々もうかうかしていると、今日中に帰ってこれなくなるかもしれない。6時半出発。

取り付きは簡単である。駐車場から造られた斜面を下り、小滝川を飛び石沿いに対岸に渡れば南壁基部に着く。アプローチ5分。左岩稜の取り付きは捗さなくともすぐにわかった。なぜなら順番で長蛇の列ができていた。さすがはP6南壁の入門ルートだけのことはあると感心しながら列の最後に並んだ。

煙草を何本か吸い、あくびを十数回したころやっと我々の順番がきた。さて1ピッチ目はルート図を読むと、20m V級、5mのバルジ～階段状とあった。「ハテ? バルジ、どういう意味だろう」考えていてもしようがない。とにかく登ってみる。少しかぶり気味だが、ガバをつかみ強引に登る。その上がテラスになっていたが、そこでも先が混んでおり、とても佐藤が来ても立てるスペースはなく、佐藤には下で待機していくもらう。1ピッチ登っては、次のテラスで順番待ちが続く。登っている時間より待機の時間のほうが長い。3ピッチ目より人工登攀となる。ここで



P6南壁をバックに

前の前のパーティのセカンドが、どうも人工があまり慣れていない。いや、もしかしたら初めてかもわからぬらしく、かなり手こずっていた。結局、彼らは懸垂で降りてきたが、ここで非常に時間待ちを強いられ、はたして明るいうちに車に帰れるかどうか不安になってきた。我々の後続もさらに数パーティいたが、みんなイライラしながら待っていた。ここから先2ピッチは人エルートとなるが、現在はフリー化されている。ボルトの連打となっており、快適な人工登攀となる。

さらにこの先は凹角25mを登り、松の木テラスに出る。ここで実質的な登攀は終了するが、草付きフェース(120m)Ⅲ級もザイルをのばし、西面下降路の入口に出た。ここからの下降ルートも以前本図さん達が通っていた頃は、ブッシュをつかみ強引に下っていたらしいが、現在ではちゃんと踏み跡が出来ており、迷うことなく下ることができた。16時、車着。

本図、原田パーティはまだ帰ってきていなかった。とりあえず車の脇にテントを張り、2人の帰りを待つことにする。南壁を見るとまだ登攀中、または時間切れで下降中のパーティがたくさんいた。あの中にまだ本図さんと原田さんはいるのだろうか。展望台に設置してある有料(1分百円)望遠鏡で右フェースのほうを見てみると、それらしき2人は見あたらなかった。テントに戻り、佐藤と夕食の準備にとりかかろうとしていたところ、2人は帰ってきた。2人ともさすがに疲れた様子であった。その夜はビールで無事下山祝いをし、チーズフォンデュを食べた。

翌日は雨が降ってきたので、朝メシを食べ、帰ることにする。時間があるので、白馬～三才山トンネル経由で帰った。途中『てるてるぼうずの館』という所に本図さんが「前からここによってみたかったんだよ」というのでみんなで期待して入ったが、全然おもしろくなかった。下館19時着。

(高田 記)



中央バンドにて

明星山P6南壁右フェースルート

1991.11.3 早さを競うS×II。P6南壁右フェースルート
パーティ L 本図一統、原田真由美
近頃、雪壁に恐怖を感じ、岩壁での宙づりを経験し、日常生活におわれて”山”から離がちになると共に、ますます山登りに対し”自分には向かないスポーツなんでは?”という思いが増してきている。そんな折り、明星行きの計画が出された。明星は以前に行ってみたいと思った山である。不安を感じながらも、明星への興味には勝てずに参加することになった。

右フェースルート、グレードV級のA2。以前に谷川岳で途中敗退した壁はIV級上のA2。まして今回のルートは長く、ガイドブックを見ても6~8時間となっている。私の実力から察するに、それ以上の時間がかかるのは明らかであろう。つい最近屏風の東稜で、ヘッドランプの明かりを頼りに、ほうほうの態で下山した時のことを思い出す。このようにすぐ昔の失敗を思い出すのは、やはり岩に対する恐怖心が強いせんだろう。”ザイルで確保されているんだから大丈夫！今までだって大丈夫だったじゃないか！”と自分に言い聞かせても、やはり一度持った恐怖心はぬぐいきれない。岩登りを始めた当初、ただただ楽しいと思っていた



右フェース2ピッチ目”この頃はまだ元気?”

た頃がなつかしい。他の人はこの様な思いはないのだろうか。自信満々に登っていく姿がうらめしい。

下館から明星までの道中は長い。11/2、ちょっと早めの20時30分に下館を出発。関越から北陸自動車道に乗り継いで、心地よい眠りから目覚めた頃、新潟県のほぼ末端、富山県側の明星山到着。時間は2時。思っていたより近い。さすが高速道路。運転手さんごくろうさま。ありがとう。ふたたび夜が明けるまで眠りにつく。

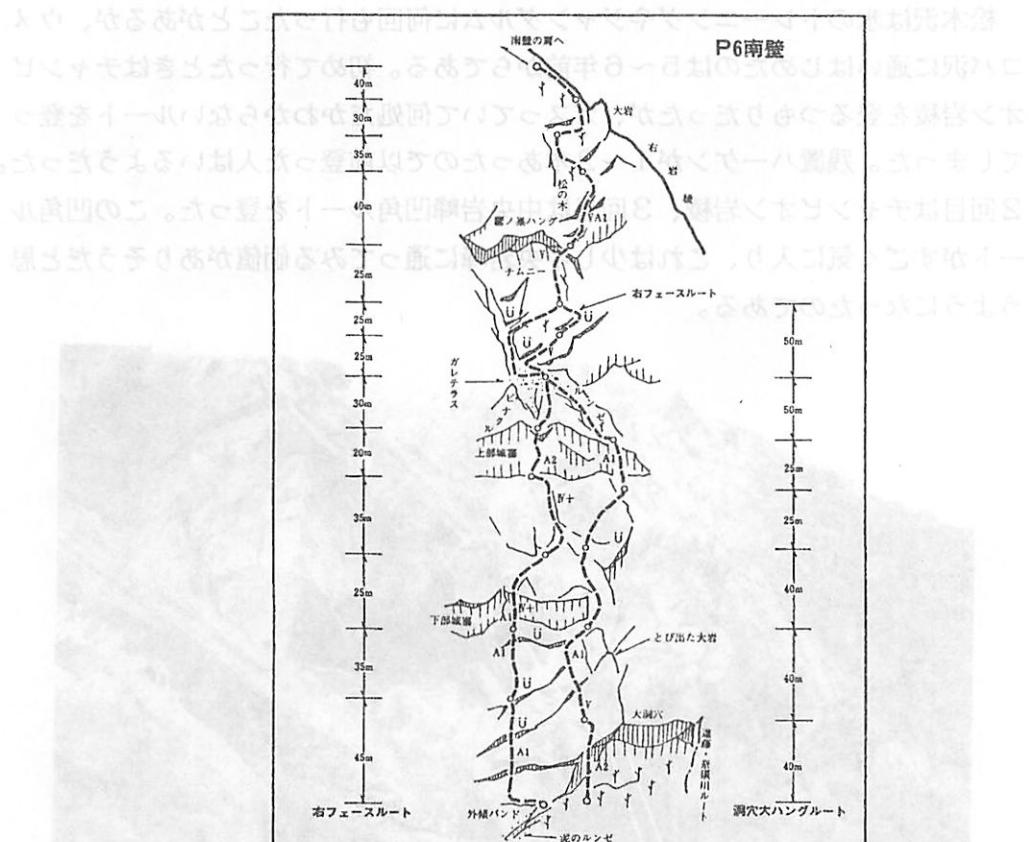
翌朝11/3、お天気良好。なんとしても本日中に下山するとの同行者の声にうなずきながら、ピバーク用のシュラフカバーをザックの底にしのばせる。6時駐車場出発。アプローチ5分。嬉しい距離である。昨夜は良く眠れたので、体調も良好。水量の乏しい小滝川を飛び石ぞいに渡り、豪快なダイレクトルートを見上げながら、さらに詰めたところに右フェースルートの取付点がある。右フェースは下部に数段のハングを連ねて見事なスラブ帯を形成し、さらに下部と上部に城塞と呼ばれるハング帯が横切っている。上部岩壁は鷹の巣の大ハング帯によって特徴づけられた人工とフリーのミックスしたルートである。

ガチャ具を付け、いよいよ登攀開始。緊張が高まる。外傾バンドを左に5mトラバースしてスラブに出る。このスラブを人工で直上し、ハングを2つ越す。さらにスラブを人工とフリーで直上し、下部城塞下のテラスに出る。ここまで3ピッチ。毎度毎度感じるが、人工からフリーに移行する時の緊張感、ついつい行動が停止してしまう。勇気を引き出すまでに必要以上の時間がかかる。そのうちザイルを伝わってパートナーのイライラが感じられる。思い切って逆層の岩を逆手に持ち、重心を岩から離してすばやく次のホールドを捜し当てる。一瞬の緊張と恐怖。下部城塞からはIV+～V級のフリーとA2の人工のピッチが延々と続く。最近はフリー化されているらしく、所々にチョークの跡が残っていて驚かされる。単調なアブミのかけかえ、豪快なフリーの登り、スッパリ切れ落ちたクラックでの微妙なバランス、そして細かいホールド上でのトラバース。隣のルートでは雨のような落石に騒いでいる。しかしそんな騒音も感じられない。私だけの緊張の時間。かぶり気味の黒い壁を人工で越え、悪いフリーでハング下を右上し、右斜上するチムニーをぬけて右岩稜に出た時は、身も心もボロボロになっていた。

ピッチ数、13ピッチ。所用時間8時間。まだ陽は高い。上出来である。しかしながらパートナーは私の努力を認めてくれない。顔を見るなり一声、「オ・ソーカ。待ちくたびれた。」 “悔しい” 背を向けて悔し涙をこらえる私に、遅め

の昼食を取っているパートナーは「食うかい」とコンビニのいなりずしを差し出している。どうもこのパートナー、自分の言った一言で私がこれほど傷ついているということがわかっていないらしい。”コノヤロー”しかし、私がACC-Jに入ってからの4年間、諦めもせずに山に連れて行ってくれる人間である。実はやさしい人間なのである。ガイド料免除ということで、さっきの一言はゆるすることにする。もしかしたら、この奇妙な仲間達がいるから、恐怖に耐えながらも山に登っているのかもしれない。あーあ、いつまでこの恐怖を味わっていかなければいけないのだろう。

(原田 記)



松木川ウメコバ沢中央岩峰右ルート
～R6スペリ台
91.11.10

パーティー L 高田暢年、本図一統

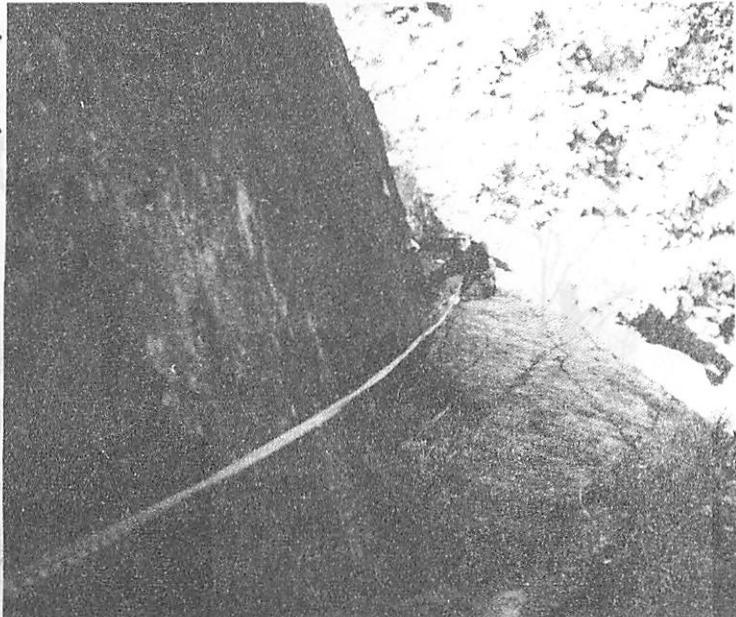
松木沢は氷のトレーニングやジャンダルムに何回も行ったことがあるが、ウメコバ沢に通いはじめたのは5～6年前からである。初めて行ったときはチャンピオン岩稜を登るつもりだったが、ガスっていて何処だかわからないルートを登ってしまった。残置ハーケンが1～2本あったので以前登った人はいるようだった。2回目はチャンピオン岩稜、3回目は中央岩峰凹角ルートを登った。この凹角ルートがすごく気に入り、これは少し中央岩峰に通ってみる価値がありそうだと思うようになったのである。



中央岩峰右ルートを登る

松木沢本流の水量は少なく飛び石伝いにウメコバ沢に入れた。以前はジャンプはどちらかというと得意だったのだが、足を骨折してから全く苦手になってしまった。ジャンプ力は減退するし、着地の時足は痛いし、それよりも恐怖心が先にたってしまうのだ。柳又のあの時のあの事が頭にこびりついて離れない。話をもとに戻すが、ウメコバ沢のアプローチは虫のけつなので問題なし。本日は右ルートを登ることにしよう。1ピッチ目、凹角右のフェース40mⅢ。2ピッチ目、凹角40mⅢ。3ピッチ目、フェース10mⅡ。4ピッチ目、クラックからフェース40mⅣ。5ピッチ目、ハング気味の凹角40mⅤ。6ピッチ目、フェース40mⅡ～Ⅲで終了する。

中央岩峰は、登り終えてみると本ちゃんの登攀と同じ充実感がある。ギリギリのバランスも多いし、残置ハーケンも少ない。取り付きまで下降するも、まだ陽が高いのでもう一本。R6スペリ台を登ることにする。1ピッチ目、フェース、40mⅢ～Ⅳ。2ピッチ目、フェース40mⅢ。私はトップロープでダイレクトルートを登ってみる。”ウーン、ルート図通りVI-はあるな！！”出だしの所にボルトがあるが、後は30mノーピンである。リードするにはけっこう恐いと思われる。フリークライミングの連中ならフレンズでも使って簡単に登ってしまうんだろうか。高田にもここを登りなおしてもらう。”ウーン、やはり細かい”との感想。3ピッチ目、フェース20mⅢで終了。これからウメコバで登りたいルートは、中央岩峰では、右岩稜チコちゃんルート、正面壁直登ルート、左岩稜フランケの恵子ちゃんルートとスーパークレールルート、ウメコバ尾根の末端壁の5本だ。1年に1本づつ登っても、あと5年は楽しめるな。フム、フム、ニンマリと往路を戻っていく二人であった。



(本図 記)

R6スペリ台ダイレクトルート

裏妙義・西大星

91.11.23

パーティ L 本図一統、佐藤文則

連休の初日だけを使った大変珍しい山行である。富士山にも行きたかったが、佐藤のアイゼンワークが不安だというのではしかたがない。精進してから挑戦しよう。で、この時期コレといって私達にぴったりの山（ルート）がなく、本図さんの大好物の裏妙義へ行くことになった。昨年も一度この山域へ来たが、その時は大した登攀もなく終了してしまった。今日はどうであろうか。

例によって夜が明け始めて間もない頃、廻り全体がモヤの中から現れだす頃、寝ぼけながら起き始める。しばらくして朝めしを食う。さあ出発だ。なだらかな山道を少し行くと沢との出合になる。おっといきなり急登だ。まあ妙義だしすぐ終わるだろう。いやいやそうは問屋がおろさない。まだまだ続く。どこまで続く？いい加減嫌気がさしてきた。おっ、前が開けたぞ。休むかな？休むかな？休みだ～！鼻曲がりの大岩である。横川の駅がはるか下方の彼方（大きさである）に見える。えつ、もう行くの、てな感じで本図さん出発。慌ててカメラをしまって、後を追う佐藤。またもや急登、ぐんぐん登る。前方、これこそ本当にはるか彼方



(写真) 図本

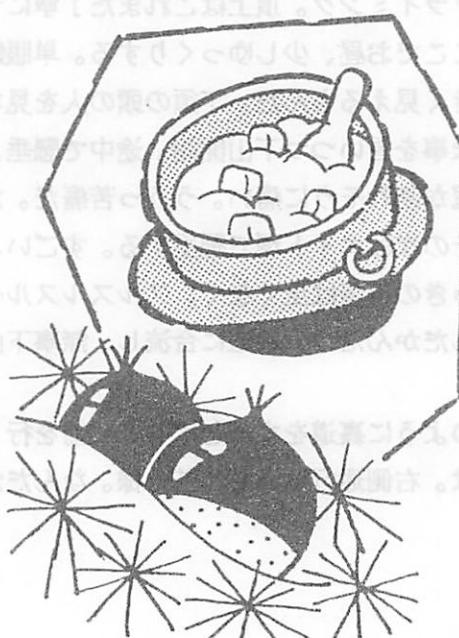
に金槌形の山が見える。本図さんが丁須の頭だと教えてくれる。他人事のように聞いている。あまりに遠いから見るだけだと思っていたのだ。甘~い。そこまで行くというのである。さらにさらに、そこから続くまだ先の山が今日の目的地であるというのだ。ヤラレタ。妙義をなめていた。ただのヤブ山だと思っていた。ヤブこぎするまでにかなりのアプローチだ。しようがねえ、気合いを入れるか。ほうら見ろ、なんだかんだ言つてると、もう御岳山頂。ここから丁須の頭まであと1ピッチ。もうそんな大した急登もない。楽勝でえい。丁須の頭の直下に来て、又、驚いた。金槌の上に登るのがこれまたえらい登りだわ。ザイルを出して登る。かぶり気味で体を張り出して登らなくてはならない。おお怖。それでもてっぺんに立つと気持ちいい。（この時はまだ裸になるくせはついてないので本図さんも安心だ）さてさてこれからまだアプローチ。本当に長い。やっとこさ西大星の前まで来た。ここで初めてハーネス他をつける。まずはヤブから、そのうち岩が出てくるのだろうと思いながら、ヤブをこぐ。バキボキ音をさせて登るのはなかなか楽しい。前方にちょっと岩らしいのが見える。偵察、ウーン登れそうもねえな。岩をあきらめてしばらく行くと、見晴らしのいい所に出る。下はすっぽりと切れ落ちている。本図さんが寝ころんじやつた。何をするんだろう。見ている。そう寝ころんで首だけ出して下を覗いているんだつた。絶句。そんなこんなで小さなピークを2、3登って、終わりに西大星登場。それ行くぞ。ちょっとばかし岩っぽい。でもノーザイルで登る。下部はバンド状で上部はフェースっぽい。せいぜい3級下～3級のクライミング。頂上はこれまた丁寧にヤブ。ごちそうさまです。もうヤブは十分。ここでお昼、少しゆっくりする。単眼鏡を出してあっちこっち見る。けっこう大きく見えるもんだ。丁須の頭の人を見ながら、誰かおちねえかなあなどと無責任な事を言いつつ下山開始。途中で懸垂。初めて肩がらみをやってみる。痛い。お尻が割れそうに痛い。ううつ苦痛だ。たった7～8mの下降がとってもつらい。その次はエイト環で懸垂する。すごい、8環の発明者は偉い、とにかく偉い。さっきの苦痛は全くなく、スルスルスル～ッと降りる。人間ってかしこいなあ。なんだかんだで一般道に合流し、無事下山。今日も一日お疲れさまでした。

おまけ、いつものように裏道をすっとばして、前を行く車を追い越したら、おまわりさんと今日は。右側通行違反でご苦労様。なんだかんだと忙しい一日でした。

車発7：15 — 鼻曲がり8：00 — 御岳山9：00 —
丁須の頭9：50 — 赤岩10：50 — 西大星12：12~40 —
車着14：40 (佐藤 記)



丁須の頭



フリークライミングのメッカ城ヶ崎海岸～佐藤君の心模様

91.11.25～28

パーティ L 酒井祐晃（筑波大WV）、佐藤文則、他7名（筑波大WV）

I want to break free!等と歌いながらアルパインに身を沈めている（どっぷりとつかっている）佐藤であるが、今回は久々のフリー、フリイ、FREEのCLIMBINGである。嬉しい。

10月中旬

佐藤「もしもし、文ですけど、秋休みどつか行くんかあ？」

川端「おー佐藤か、久しぶりじゃのう。酒井が城ヶ崎行くみたいやで」

佐藤「ほうか、ほな混ぜてくれや。今度は絶対やで！」

川端「おーわかったわ。言うとくわ。お前いつも遅すぎるんやわ・・」

というような電話から今回の山行に佐藤は決めた。

11月初旬

佐藤「文やけど、城ヶ崎どや」

川端「お一人数多いぞ。4年生とか、岩登り研究班の人で一杯で、ぎょうさん登れそうやで」

佐藤「やったあ。先輩と登るんの久しぶりやし、岩やし、むっちゃ楽しみやわ！」

川端「ほーか。そりや楽しみやな。お前は大丈夫か？」

佐藤「ばっちしや。ちゃんと開けてあるし、新聞も休み取ったし・・」

というような電話で期待がふくらむ。

11月中旬

佐藤「文やけど、城ヶ崎どや」

川端「お一人数変わったで。1年生は岩初めての奴とか増えて、先輩ら来んようになったわ」

佐藤「マジかよー。面白あらへんやんけ。俺も行くんやめよかなー」

川端「えー」

佐藤「まあ、ええか。ふんで車はどうないするんや？」・△一次

川端「人数多くて車じゃ無理やから電車や。それで民宿に泊まるんやわ」

佐藤「げっ！いくらかかんねん。ちょっとやってられんなあ」

川端「まあしやないやんけ。お前ら（ACC-Jのこと）と違ってワングル
はいろいろるさいやから。お前知つとるやろ」

佐藤「まあそやけど、うーん、ちょっと考えるわ。次のリーダー会までに返
事するさかい、ヨロシク」

という会話があった。ここにきて、楽しみだけであった山行に憂鬱さが加わった。
行くのが面倒くさく感じられるようになってきた。最初の予定と大違いになった
この山行どうしようか。城ヶ崎には行ってみたい、でも・・。でも・・の部分が
多い。佐藤君は迷った。心の葛藤が、あー私はどうすればよいのだろうか？ジャ
カジヤン！

11月下旬

佐藤「おー、城ヶ崎どや？」

川端「11月25日平砂集合で、26、27民宿泊まりで、28日昼頃まで
やってで決まりや」

佐藤「人數は？」

川端「13人。1年生が・・えーと8人や」

佐藤「ふーん登れるかなあ」

川端「まあ、なんとかなるやろ」

佐藤「ほな、25日夜平砂やな」

川端「おー、遅れるなよ」

というわけで結局行くことにした佐藤だった。

さて、実際の山行はというとこれがまたひどいものになってしまった。雨のお
かげで合計1日半しか登れなかったのである。佐藤の個人的な記録は

26日 ベビークラックの右の無名ルート 5.6程度 完登

シスタークラック 5.8 完登

アンクルクラック 5.9 下部ハング～上部ハング

下まで

クレセントアーチ 5.8a 核心部に届かず、

歯が立たないという感じ

27日 名前不明 5.7 完登

カーム・フライデー 5.9 下部取り付き付近のみ

ラッキー・ストーン 5.9+ 核心部下まで行けず

以上の7本と適当なボルダーを登ったのみで、27日午後から雨は小雨から強風混じりの雨となり、28日は朝よりの強雨で登れなかった。各ルートともクラック主体の腕力ルートで、何回も落ちた。特に5.9以上は1ムーブごとに落ちたりもして、ちょっと情けないというか、自分自身あきれてしまった。今後の課題はやはり5.9でしょう。腕力の不足よりもバランスの悪さを感じました。

以上ゲレンデの登りよりもそれ以前の山行までの長い道のりを主体にして書いてみました。これは、ゲレンデでの登りには色々な笑い話もありますが、メンバーがACC-Jの会員でなかったので、説明が煩雑になるのを避けるため、あまり書きませんでしたので、あしからず。

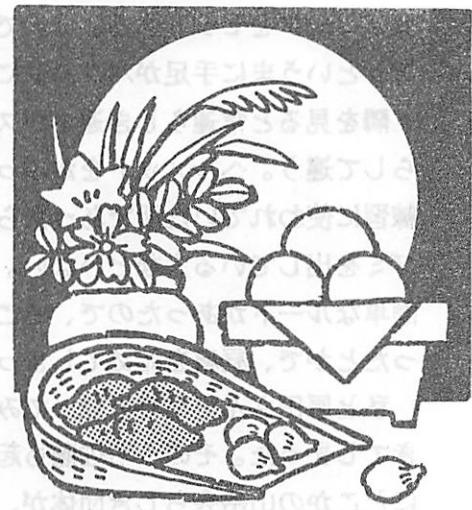
番外：民宿で我々お腹をすかせている一行はおひつのおかわりをして、宿のおばちゃんに大変気に入られました。

参考：川端、筑波大3年。平成2年～3年WV主将。

晴れていれば、ただそれだけで機嫌がよくなる幸せ者

佐藤がACC-Jに移ったため、ワンゲルの岩を後継する任務を
背負わされてしまった。ゴメン。

（佐藤 記）



鷹取山岩トレ

91.12.15

パーティ L 高田暢年、原田真由美、佐藤文則

鷹取山は一応山という名前がついてはいるが、横須賀の高台にある公園であり、その中に採石事業により出現した岩塔がロッククライミングの練習場として有名な所である。

前日佐藤はうちに泊まり、原田さんは当日朝6時にうちに来て、荒川沖駅より電車で出かける。横浜駅内で立ち食いソバを食べ、ここから京浜急行に乗換え、「追浜駅」で降り、湘南病院の脇を抜け、閑静な住宅街を抜け、鷹取山のふもとの西友ストアに10時頃着く。ここで昼飯を買い、鷹取山へむかう。

公園内に入ると、すでに沢山の人がいたるところにトップロープを垂らし、取り付いていた。ほとんどの人が常連さんらしい。我々は3人とも初めてなので、ルート図を見ながら公園の中をウロウロしていると、「親不知」に着いた。ここも既に数パーティがトップロープをセットしていたので、我々もここを登ってみることにする。上に回ってみると下に横須賀港が見おろせるなかなか眺めのいい所である。

トップロープセット専用の太いクイが何本か打たれており、これを利用し、トップロープをセットする。3人で交替でチャレンジしてみるが、5mも登れない。アッという間に手足がパンパンになってしまった。

隣を見ると常連らしき連中がスイスイと登っていた。彼らと我々とでは服装からして違う。ヘルメットをかぶっている人なんて殆どいない。昔ここはアブミの練習に使われていた所であったらしいが、今ではみんなフリーで登っており、アブミを出している人などいない。昼食後、午前中チャレンジした隣にⅢ級程度の簡単なルートがあったので、そこを登ってみる。佐藤は食べ過ぎで気分が悪くなつたとかで、昼寝を始めてしまった。

私と原田さんで交替で登ってみたが、ここは簡単すぎて何本か登ってすぐにあきてしまった。そのうち佐藤も起きてきたので場所を変えることにする。後浅間にどこかの山岳会らしき団体が、ザイルワークから懸垂下降の練習をしていた。その脇にⅣ級程度のルートが空いていたので、今度はそこにトップロープをセットし、また三人で交替でチャレンジしてみる。ここは三人とも苦労しながら登る

ことができた。我々の実力ではこの辺が限度だと思われる。

そういうふうにしているうちに時間も4時頃になり、周囲も帰り支度を始めている。我々も、もう登るところもありそうもないで帰ることにする。帰りは横浜で「シュウマイ弁当」を買い、3人で「常磐線の中でビールでも飲みながら食べようか」と話ながら常磐線に乗り込んだ。御歳暮シーズンのためか、日曜日だというのにやたらと混んでおり、何とか座ることはできたが、私は2人と離れてしまい、私の前にはミニスカートの女子大生風のイケイケギャルが2人座っていて、とても弁当を出せる雰囲気ではなかった。結局3人とも荒川沖まで弁当を持って帰ってしまったので、私のアパートで電子レンジで温め、3人で食べて解散となった。

予。>走アシ多イ>主觀的の式<外部化>副歌曲段落の二。(高田 記)



鹿取山ゲレンデ

岩手山に遊ぶ

91.12.22~23

パーティ L 本団一統、原田真由美、佐藤文則、川上浩史

岩手山に行こうというのである。長い間雪をいじっていなかったので、ピッケルやアイゼンのサビ落としに雪訓気分で出かけた。例によって下館集合。本団さんのハコに乗り込み、出発。東北道をひた走り、御神坂駐車場へ。

12月22日 ハコの中は寝心地が良く、大寝坊をしてしまい、登山開始は日が高く昇ってからであった。登山者カードに記入して、雪の上を歩き出す。水平に近い道が続く。この日は気温が高く、快晴だったので腕まくりをして歩く。それでも暑い。更に、家を出るときに水筒に水を汲むのを忘れてきた上に、登山口で水が手に入らなかつたので、汗をかくと、雪を口に入れながらの登山であった。樹林帯の日陰の中はまだましで、森林限界を過ぎ、登りがきつくなると、岩陰にあるつららを折ってガリガリかじるという醜態をさらしてしまった。

えんえんと登りが続き、外輪山の稜を乗っ越すと、快適な下り斜面になっていた。雪の下りは大好きなのでガンガン下る。下りた所が不動平、今日のテント場である。テント場を整地して、しっかりテン張った。



昼食のひととき

テント設置後、社長と原田さんが頂上に出かけた。時刻は昼の三時過ぎ。日の光はすでに頼りなく、今から出かけてもテント帰着は真っ暗になってからという事が予想されたので、佐藤君と二人で留守番をし、水作りや整理、食事支度をすることにした。すると、テントを整理後、水も充分に作っていないうちに社長達は戻ってきた。ずいぶん速く往復した様子であった。

全員が揃って一段落。担ぎ上げた2リットルのビールは一瞬にして空っぽになつた。酒を飲みながら食事をしていると、雑談が始まり、社長の巧みな誘導尋問で、原田さんは正月合宿の参加者全員分の初日の朝食を準備することになり、商談が成立した。食後は快晴無風の好条件でぐっすり深い眠りについた。

12月23日 朝、起きる頃になると風は強く、テントは傾き、フライがバタバタと音をたてている。これは下山かなと思っていたが、外へ出てみると高曇になつていて、風もあまり強くない。フライの張り綱が緩んでいるだけだった。

そこで佐藤君と二人でアタック開始。お鉢めぐりなど朝飯前という事で、朝食もとらずに出る。内輪山の一角につくと火口が見渡せる。信仰の対象の山であるらしく、道にはお地蔵様がたくさん並んでいた。お地蔵様の背後には巨大なエビのシッポが成長しており、直径1mにもなる大きな氷塊になっていた。

岩手山の頂上に立つと下界がよく眺められる。頂上で写真を撮ろうという時、



岩手山頂の雪女

なんと佐藤氏はヤッケを、シャツを脱ぎ始め、上半身裸になってしまった。女の子と山に登って、その子がこんな事をしたら大変な騒ぎになるだろうが、そこは野郎同士、気の合った仲間なら笑って済ませられる。今回の山行をきっかけに、彼は冬山の頂上で裸で写真に写ることを恒例にするらしい（？）。

頂上から二、三歩下ると完全無風状態になっていた。火口を巡っていると、一部分、雪が全く無く、砂地がムキ出しになっており、湯気がたっている。行ってみると硫黄の香りがする。手袋を脱いで砂を握ってみると暖かい。まさに大地の香り、大地の温もりである。テントに帰ると、社長と原田さんが朝食を用意してくれており、軽い（？）運動の後なので食が進む。

食事を終えると撤収し、早々に下山にかかる。外輪山の稜までは登りだが、それ以降はひたすら快適な下り斜面が続く。雪質も適度にクラストしており、とばせる。落っこちる様に降りていくと暑くなり、上半身は下着だけになって、腕まくりをして涼しい格好となる。登山口に帰ると、もう昼になっていた。

昼飯を何処で喰うかはすでに決定しており、盛岡駅前でわんこそばを気が狂つたように食べまくり、記念品をせしめて勝ち誇って帰った。

（川上 記）

